

日本地震学会 2013 年秋季大会特別シンポジウム

教育を通じた地震災害軽減の現状と課題

開催案内

日時：2013 年 10 月 7 日(月曜) 15:00 - 17:00

場所：神奈川県民ホール (大ホール)

1. 趣旨

平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震によって、地震災害に関する教育の重要性が今まで以上に認識されるに至った。そこで本特別シンポジウムでは、「1）一般社会が教育を通じた地震災害軽減に対して何を望んでいるかという学会外からの要請に耳を傾ける」、および、「2）地震災害を教えるにあたっての中学・高校の地学・地震教育の現状を共有し、課題の整理を通じて体系的な教育内容のあるべき姿について研究者側からの提案を目指す」、という 2 つの側面から議論を行い、（公社）日本地震学会の今後の取り組みについて提言する。

2. 参加登録について

秋季大会の他のセッションと同様に、本シンポジウムの参加には大会参加登録が必要です。詳しくは、日本地震学会 2013 年秋季大会ホームページ <http://www.zisin.or.jp/meeting/2013/index.html> を参照して下さい。

3. 総合討論について

基調講演での講演者に加えて会場からも意見を募り、地震学会としての今後の取り組みについての提言をとりまとめる。

進行：中川和之（時事通信社）・香川敬生（鳥取大）

指定討論者：武村雅之（名古屋大）

4. 実行委員会

伊東明彦（委員長，宇都宮大学）

中川和之（時事通信社）

津田健一（清水建設）

香川敬生（鳥取大学）

5. プログラム

日時：2013年10月7日(月曜) 15:00-17:00

場所：神奈川県民ホール (大ホール)

司会 津田健一(清水建設)

15:00 開会挨拶 伊東明彦(宇都宮大)

15:05 S-01* 釜石の奇跡と悲劇
末永正志(日本ボーイスカウト岩手県連盟理事長)

15:25 S-02* 防災教育の実践ー想定被災地から
杉山隆通(静岡県危機管理情報課)

15:45 S-03* 学校での地震教育, 地震防災・減災教育の現状と課題
～「理科」などの教科教育と“安全教育”などの教科外教育との関係～
根本泰雄(桜美林大学自然科学系)

16:05 S-04* 納得しわがことと思い行動を誘発する防災教育のために研究者の
できること

福和伸夫(名古屋大学減災連携研究センター)

16:25 総合討論 進行 中川和之(時事通信社), 香川敬生(鳥取大)

16:55 閉会挨拶 加藤照之(東京大学地震研究所)

* は招待講演

6. 講演概要

S-01 「釜石の奇跡と悲劇」

末永正志

発災時、釜石市鶴住居地区の小・中学校に居た児童生徒 580 人は大津波の襲来を予期し率先避難し無事全員が助かった。報道機関はこれを「釜石の奇跡」と言う。その一方で、同じ地区の鶴住居地区防災センターでは、240 人を超える人が津波の犠牲になったと推計され「釜石の悲劇」と言われる。ほとんどが成人だ。成人の防災教育はどうあるべきか。この時、地震学は人命を救うために社会貢献できるのか。

S-02 「防災教育の実践—想定被災地から」

杉山隆通

静岡県では、東海地震（南海トラフ巨大地震）の発生を想定し、県民個人が取り組む「自助」と、地域住民等による「共助」の推進に努めているが、これらの地震防災対策を確実なものにするためには、県民を対象とした日頃の防災教育が重要である。そこで、本県が実施している防災教育や防災に関する人材の養成・育成の事例を紹介するとともに、地域学としての防災学創出についての新たな取組を紹介する。

S-03 「学校での地震教育，地震防災・減災教育の現状と課題～「理科」などの教科教育と“安全教育”などの教科外教育との関係～」

根本泰雄

学校（小・中・高等学校等）での地震教育，地震防災・減災教育は，教科「理科」だけでなく，視点の違いにより「社会科」や「保健体育科」などの複数の教科にて教科教育として行われている。また，“安全教育”として教科外教育でも行われている。取り扱われている内容の配列は，校種や学年が考慮されているとは思えないのが現状である。今後の教育改善を目指すため，顕在化している課題を含めて，現状の概観の解説を試みたい。

S-04 「納得しわがことと思い行動を誘発する防災教育のために研究者のできること」

福和伸夫

災害研究は，被害を軽減させるという明快な目的を持っている。メカニズム解明や，正確な予測，被害軽減方策などの研究に加え，社会の減災行動を誘発する研究も必要である。社会の構成員を具体的な実践に誘導するため，研究者ができることはたくさんある。研究者自身が率先市民となると共に，研究成果の本質を分かりやすく伝え，解決策を提示すると共に，わがことと感じさせる環境作りである。研究者の防災教育活動の可能性について論じてみたい。